

機関番号：34319
 研究種目：若手研究（B）
 研究期間：2008～2010
 課題番号：20720177
 研究課題名（和文） 浜岡光哲関係文書の基礎的研究—近代日本地方財界人の多面的分析へのアプローチ—
 研究課題名（英文） Fundamental research of records relating to Hamaoka Kotetsu — An approach to a multifaceted analysis of modern Japanese local financiers
 研究代表者
 秋元 せき（AKIMOTO SEKI）
 京都造形芸術大学・芸術学部・非常勤講師
 研究者番号：20469208

研究成果の概要（和文）：

浜岡光哲は、政治・経済・社会・文化など多方面の活動を展開した地方財界人の典型といえる人物である。本研究では、浜岡光哲関係文書（浜岡家文書）の調査・研究と、近代日本の地方財界人の役割に関する多面的分析に取り組んだ。この関係文書の調査を通して、地方財界人が近代日本社会の形成にどのような役割を果たしたのかという問題を実証的に解明するため、その基礎となる調査を行った。この中には、明治から昭和初期にかけての浜岡光哲の活動に関する文書のほか、近世後期に院承仕兼御経蔵所として出仕した地下官人・浜岡家の活動に関わる文書が含まれ、近世から近代への移行期の地域社会を研究する上で重要な史料群であることが明らかになった。

研究成果の概要（英文）：

In this study, I elucidated the role that they have played in the formation of modern Japanese society, and with that as the underlying basis I continued the investigation and research. Through investigation and research over documents related to Hamaoka Kotetsu, I have tried to conduct a multifaceted analysis on the roles of local business leaders in modern Japan. It has become clear that these documents include the important documents on the activities of Hamaoka family who served the court during Edo period.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	1,200,000	360,000	1,560,000
2009年度	1,000,000	300,000	1,300,000
2010年度	900,000	270,000	1,170,000
年度			
年度			
総計	3,100,000	930,000	4,030,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：史学・日本史

キーワード：近代日本・地方財界人・浜岡光哲・地域社会・京都・地下官人

1. 研究開始当初の背景

日本近代史・都市史研究においては、各地の公文書館に保存されている公文書はもとより、かつての政治家や官僚の遺族から提供された私文書（家別文書など）の調査・分析は必須条件となっている。『松方正義関係文書』『伊藤博文関係文書』『三条実美関係文書』『黒田清隆関係文書』あるいは『原敬日記』『尾崎三良日記』などは、その一例である。とくに、近年盛んな政治史研究では、こうした個人旧蔵史料の活用が重要となる。

このような個人旧蔵史料の中には、政治や行政分野の活動のほか、経済・文化・教育・言論活動、家の維持、郷里との関係など多様なものが含まれる。例えば、一人の政治家の活動を考えた時、その人物がどのような企業活動を行っていたかは、その政治活動の検討にも欠かすことのできない情報である。しかしながら、政治家として著明な人物の関係文書の中に含まれる企業の営業報告書や、社員からの書簡などが本格的に分析されることは少ない。誤解を恐れずに言えば、政治史研究や思想史研究など個別の領域での研究の材料として、近現代史料の調査・研究がおこなわれる傾向があり、このことを背景に、史料の研究・利用にも特定分野への偏りが生じている状況があった。

また、京都などの地方都市において、地方財界人でありながら政治・経済・文化の多方面で活躍した浜岡光哲のような人物と、その関係文書の総合的研究に、本格的に取り組むための基礎研究を行う必要があると考えた。

2. 研究の目的

本研究は、浜岡光哲関係文書（浜岡家文書）の調査・研究を通して、近代日本地方財界人の活動に関する多面的分析を試みようとするものである。

ここで研究対象としている史料群には、江戸時代に朝廷につとめた官人の「家」である浜岡家の活動をものがたる古文書のほか、明治期に京都商工会議所創設の中心となるなど、近代に政財界で活躍し、京都の「元老」とも呼ばれた浜岡光哲の関係資料が含まれている。

（注）浜岡光哲は、1853年に京都府葛野郡嵯峨村の大覚寺坊官・野路井盛彰の三男とし

て生まれ、京都で大経師を家業とした浜岡家の養子となる。1879年、京都商報会社を設立し、『京都商事迅報』（現在の『京都新聞』の最も古い前身紙）を府の援助のもとに刊行。のち『京都新報』『日出新聞』などを発刊し、1902年に辞職するまで社長として経営の中心となり、京都を中心に購読者を拡大し、地方新聞として現在にもつながる地盤を築いた。また、こうした印刷技術を利用して、美術雑誌も刊行し、美術・工芸界の情報発信にも関わった。

一方、政界では、1880年代以降、京都府会議員、京都市会議員、衆議院議員（1890年から三選）などを歴任し、従兄弟にあたる田中源太郎とともに、京都政界の中軸を担って活躍した。一方、財界においては、1882年に京都商工会議所を設立する際の中心となり初代副会長に就任、1884年同会長となり、以後会長職に重選された。このほか、京都取引所・京都商工銀行・京都織物会社・京都陶器会社・京都倉庫会社・関西鉄道会社・関西貿易会社・北海道製麻会社・京都鉄道株式会社・京都電鉄株式会社・朝鮮無煙炭鋳株式会社・京都火災保険会社などを創立し、多くの事業に重役として参画した。1901年に関西貿易が破綻し、恐慌のあおりを受け、一時公職から退くが大正期に再び活躍、1936年に死去した。

このように、本研究が主たる対象としている浜岡光哲は、近代日本の地方財界人を検討する上でのキーパーソンであるといっても過言ではない。海外での経営活動を含め、政治・経済・社会・文化など多方面の活動を展開した地方財界人の典型といえる人物である。この関係文書の調査・研究を通して、この人物の実像に迫り、地方財界人が近代日本社会の形成にどのような役割を果たしたのかを実証的に解明することは、これまでの研究史の空白を埋める意味でも、有意義なものであると考える。

3. 研究の方法

浜岡光哲については、戦前期に、伝記（西川正治郎編『浜岡光哲翁七十七年史』浜岡翁表彰会、1929年）が刊行されている。ただ、同書はあくまでも当時活躍中だった浜岡光哲の顕彰を目的とするものであり、学術的か

つ実証的に事実を明らかにしたものではなかった。また、伝記編纂に用いられたと考えられる原資料の存在も明らかではなかった。

しかし、数年前に、京都市内の遺族宅から、浜岡光哲関係文書（浜岡家文書）が大量に発見された（現在は京都市歴史資料館寄託）。この文書には、近世から近代にわたる古文書が含まれており、その内容も、近世における大経師としての活動に関わる文書や、近代の地方銀行・貿易・電燈事業などの実業活動や、初期の新聞事業に関わる文書、また、衆議院議員・地方議会議員などの政治活動に関わる文書など、極めて重要かつ多岐にわたるものである。

この関係文書の研究を進め、実証的に分析することで、華族や志士出身の政治家・官僚とのネットワーク、また、政治家と財界人という両面をもつ人物の行動様式、文化的事業への関心、近代化の過程における士族授産など、これまで未解明であった問題の解明に取り組む。また、このような朝廷に出仕した官人の「家」から、近代における地方実業家が台頭してくる背景とその歴史的意義の解明も視野に入れ、研究を進める。この文書群の調査・研究を進めば、院承仕御経蔵所に出仕した官人の活動に関する実態が明らかになるものと考えられる。

このほか、これまで未整理であった分の整理と目録作成に取り組む。特に、近代分については、一万点を超える未整理文書があったため、仮目録の作成にあたっては、写真版をもとに、入力作業などを外注して作業を効率化し、目録データの整理を行う。

4. 研究成果

まず、浜岡光哲関係文書（浜岡家文書）の全体像を把握する作業に着手した。浜岡家は、江戸時代に朝廷につとめた官人の家でもあったため、一年目には、近世期に重点を置いて調査を進めた。その結果、浜岡家文書は、院承仕兼御経蔵所として出仕した地下官人の活動を解明する上で極めて重要な史料群であることが明らかになった。この中には、近世から近代への移行期の文書も多数含まれる。

これ以外に、浜岡光哲および浜岡家の実像を解明するため、この周辺の一次史料の調査にも取り組んだ。田中源太郎（光哲の従兄弟）

や三浦豊二（京都商工銀行幹部で『田中源太郎翁伝』編纂者）などの関係文書を調査することにより、異なる視点から記録される浜岡光哲の役割を明らかにする手掛かりが得られた。

さらに、調査のなかで、浜岡光哲関係文書に、草創期の京都の新聞事業に関する一次史料が含まれることが確認できた。浜岡光哲は京都における草創期の新聞事業の中心を担った人物であることは『京都新聞百年史』などで既に知られているが、当時の一次史料はこれまでの調査ではほとんど確認されてこなかった。また、これらの意義を解明するため、現在確認することができる当時の刊行資料（京都新聞の前身にあたる『日出新聞』『中外電報』など）についても調査した。

このほか、浜岡光哲は、大正期に京都市区改正地方委員・京都都市計画地方委員などをつとめ、京都の都市計画に関与した。また、大正期京都の都市計画についても、史料調査を行い、研究を進めた。

この作業と併行して、国立国会図書館・京都大学経済学部附属図書室・京都府立総合資料館・京都府立図書館などで調査を実施し、他機関所蔵の歴史資料と比較しながら、浜岡光哲関係文書の史料的価値を検討する作業を行った。なかでも、国立国会図書館・京都大学経済学部図書室が所蔵する京都商工会議所に関する資料を調査することにより、浜岡光哲と京都財界の動向が京都の都市計画に与えた影響が明らかになった。

また、本研究の最終年度に、遺族宅から、新たに関係文書が発見された。浜岡家文書の調査は、今後も継続して実施する予定である。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計2件）

- ① 秋元せき、近代京都における地域開発構想と地方財界—伏見港修築と京阪運河計画をめぐって—、『京都市歴史資料館紀要』23、京都市歴史資料館、2011、31～65頁、査読無
- ② 秋元せき、1920年代京都における都市計画展覧会の歴史的意義—都市計画にみる歴史意識—、『人文学報』98、京都大学

- ③ 人文科学研究所、2009、297～325 頁、査読有

〔学会発表〕（計 3 件）

- ① 秋元せき、大正期京都の都市計画展覧会の歴史的意義について ―都市計画にみる歴史意識―、2009 年 3 月 20 日、平安京京都研究集会準備会（京都歴史研究会と平安京京都研究会の合同）
- ② 秋元せき、大正期京都の都市計画展覧会とその背景 ―都市計画にみる歴史意識―、2009 年 2 月 21 日、大阪歴史学会近代史部会
- ③ 秋元せき、大京都の時代の都市計画 ―近年発見の史料から歴史資料の伝来を考える―、2008 年 10 月 18 日、近代古都研究会（京都大学人文科学研究所）

6. 研究組織

(1) 研究代表者

秋元 せき (AKIMOTO SEKI)

京都造形芸術大学・芸術学部・非常勤講師
研究者番号：20469208

(2) 研究分担者

なし

(3) 連携研究者

なし